

見つけた!

こんな文学教材

京都教育大学 寺田 守

● 第 1 回 ●

読解のコツ―「紅鯉」(丘修三)の一文を読む

読解の落とし穴

文学教材の読解の方法について述べたい。小学校六年生教材「紅鯉」を例にとって説明する。「紅鯉」は、丘修三の郷里熊本を舞台とした短編集『少年の日々』に収められている。「紅鯉」の中に次のような一文がある。

それから、やおら右手であみを構えると、
ほくよりはるかにしんちように手早く、も
の下をさぐった。

「やおら」という言葉があるので、おじさんが落ちていてゆっくりとあみを構え始めたことがわかる。おもむろに、とほほ同じ意味であり、急に、勢いよく、唐突に構えたのではない。「やおら」という言葉があることで、おじさんの手慣れた様子がわかる。また、「は

るかに」とあり、ほくも注意深く藻の下に手をつつこんでいたのだが、おじさんはそれよりもさらに慎重に手早く動作を行った。「はるかに」とあることで、ほくとは同じ動作でも甚だしい違いがあると判断されている。「はるかに」と判断しているのは「ほく」なので、「ほく」がおじさんの手際の良さを認めているということになる。

こういった副詞や形容動詞は、言葉を削除しても文の大意が変わらないため、読み飛ばしてしまいがち。「やおら」や「はるかに」を削除しても、私たちは、あるいは同じ意味だと理解するかもしれない。しかし読み飛ばしてしまいがちな言葉の意味こそが、読解において重要な手がかりとなる。

一文から意味を紡ぎ出すコツ

では、読み飛ばしてしまいがちな言葉の意

味を理解するには、どのように読むとよいのだろうか。例えば、次のような四つのコツが有効である。

コツ一 言葉の削除による意味の変化(この言葉があるのとないのでは、意味がどのように変わりますか。)

コツ二 類義語への置き換えによる意味の変化(AとBとでは意味がどのように変わりますか。)

コツ三 動作化・映像化による意味理解(今ここで試してみたら。という光景か思い浮かべてもらえん。)

コツ四 自分の経験との関連づけによる意味づけ(これと似た経験はありますか。)

「紅鯉」の一文で説明してみる。

ほくは幸運に舌なめずりしながら、さりげないふうをよそおい、コイに気づかれないように静かに川に下りた。

「幸運に」とあるので、紅色のコイの発見を幸運だと考えている。コイを見つけたことも幸運だが、上流にも下流にも人がいるのに、誰も気づいていないことも幸運である(コツ一)。「舌なめずりしながら」とあるが、ペコちゃんのように本当に舌なめずりをしている

のでなく、心の中でしめしめと想っている(コツ三)。「わくわく」や「胸をはずませて」に置き換えて比べてみると、「舌なめずりをしながら」からは獲物を狙う野性的な興奮がわかる(コツ二)。「さりげないふうをよそおい」とあるが、上流や下流にいる人に気づかれてコイを横取りされない為のさりげなさであり、コイに気づかれたい為ではない。(コツ一)「よそおい」とあるので、意図的に演じている(コツ一)。視線を固定したり、身をかがめたりしてコイを見つけたとばれないように気をつけた(コツ三)。コイに対しては、「静かに」とあり、ゆっくりと、音や波を立てないように注意しながら川に下りた。(コツ一)道に百円玉が落ちていたのを見つけたとき、私たちは幸運に舌なめずりしながら、同時にさりげないふうをよそおうだろう。拾ったお金は交番に届けよう。(コツ四)

四つのコツを使って読むことで、読み飛ばしてしまいがちな言葉の意味を、ぐっと理解できるようになる。

コミュニケーションの形を考える解釈へ

私は、学習者の言葉の理解を深めたい、そのために国語の授業で言葉の話をしたい、と考えている。では、こうした一文の意味を紡ぎ出す解釈の先に、どのような価値目標を立

てられるのだろうか。例えば「紅鯉」に次のような一文がある。

ぼくはくちびるをかんで、おじさんをにらみつけるよりほかなかった。

「くちびるをかんで」とあり、悔しさを堪えている。実際にくちびるをかんでみると、表情から相手に悔しさが伝わる。「にらみつける」とあり、おじさんへの怒りを目で表している。にらみつける目つきをすると、相手に怒りが伝わる。「ぼく」は激しい悔しさと怒りとおじさんに無言で伝えている。「よりほかなかった」とあるので、紅鯉を見たのは「ぼく」一人であり、確かにいるという証拠も示せないで、何を言っても信じてもらえないだろうというあきらめがある。いつも言葉で説明することをあきらめている。

「紅鯉」で、わかってもらえないもどかしさに打ちのめされた「ぼく」の経験は、不幸な出来事だった。窮地に追い込まれた「ぼく」を救ったのは、たまたまやってきたひげづらのおじさんと、手ぬぐいのおばさんだった。疑われたことが不幸な出来事だったとすれば、救われ、理解されたこともたまたまの幸運な出来事だった。

では窮地を自分の手で解決することはでき

たのだろうか？ 丁寧に状況を説明したとしても、まわりの人たちは信じてくれなかったかもしれない。しかし、重要なことは、「ぼく」が説明をして、それでも信じてもらえなかったのではなく、何を言っても無駄だとあきらめていた、という点である。信じてもらえないという結果だけをとれば同じかもしれない。しかし、コミュニケーションの形としては全く意味が異なってくる。詳しく説明していれば、ひろしや青年は信じてくれたかもしれない。「ぼく」の気持ちも理解してくれたかもしれない。だが、「ぼく」はそうせず、全てが幸運にも解決したあとで、ひろしをにらみつけることしかできなかった。

すべての文学教材には、コミュニケーション(意思疎通)の形が描かれている。気持ちだけでなく、コミュニケーションの形を理解し、言語化していくことが、これからの文学の授業では大切である。

参考文献

寺田守編著、「文学教材の解釈 電子版」、京都教育大学国語教育研究会二〇一〇年(<http://kyoshien.kyokyo-u.ac.jp/public/terada/hungakupdf>)

てらだ まもる 京都教育大学准教授。専門は読む

ことこの学習指導研究(文学)。現在は小グループの読書を活用した学習活動の開発に取り組んでいる。